

## 【編集後記】

広島部落解放研究所は、創立40周年を迎えた。研究所は、部落解放運動と連携し、解放運動自体の研究も含め、部落(差別)問題の科学的研究と、その成果に基づく教育・啓発活動に取り組んできた。「実証」すなわち部落(差別)問題の現実に分け入り、これを分析し、「理論」すなわち現実の背後にあるものを抉り、現実を超克する展望を指し示す。研究所は、そのような社会科学の原則に立脚し、部落(差別)問題の解明と、そこに内在する「問題」を批判し、超克する社会理論の構築をめざしてきた。ルイ・アルチュセール(マルクス主義哲学者)は書いた。「革命的理論なくして革命的運動はない」。理論なき運動は、〈権力〉への敗北を免れない。科学性なき理論は、運動を迷妄に陥れる。新自由主義と新ナショナリズムが跋扈する現代(日本)の資本主義と国家は、それらに抗う運動や思想さえ包摂しつつある。「自立」「主体」「自由」「人権」の語が、〈権力〉の口から優雅に踊り出る。そして、部落問題の現実を隠蔽する。部落解放運動も解放理論も、そのような〈権力〉の奸計から自由ではない。部落差別が隠蔽され、差別の現実が深まるなか、それと闘う理論も運動も混迷しつつある。だからこそ、部落(差別)問題の科学的解明とその運動への還元は、どのように可能か。研究所の原点が問われ、その役割が重要になっている。

広島部落解放研究所は、このような危機認識に立ち、創立40年という節目の年にあたり、部落解放運動と連携する研究所の研究成果、すなわち認識と理論の到達点を世に示し、また、部落解放運動への問題提起たらしめんと、特集を企画し、執筆者は勉強会を重ねてきた。混迷する解放理論の解放の努力は、まだまだ続く。本誌が、部落(差別)問題の現実と闘い、部落解放の理念の実現の道標となる、そのような場となるようさらに奮闘したい。

(A)